

新連載

実験的教育論 [3]

自然農法に学ぶ人間信頼

まちだそうほう

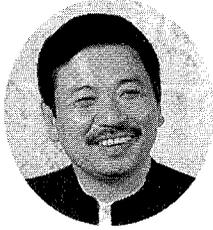
東京外国語大学教授 町田宗鳳

「無肥料、無農薬」で強く育つ作物

私の知人である長澤さん（夫婦とその息子さんは、秋田県大潟町にある八郎瀉の干拓地で、二十年以上も徹底した自然農法を実践しておられる。自然農法というのは、堆肥などで作物を育てる有機農法のことではなく、完全な「無肥料、無農薬」による作物の栽培法のことである。

長澤家の広大な農地に案内してもらったときには、収穫前の稲穂が黄金色に輝いて、たわわに実っていた。長澤さんが手がけておられるのは、おもに稲作であるが、小規模に野菜も栽培しておられる。何を育てるにせよ、「無肥料、無農薬」という方針に妥協はない。

農地を見せて頂いた後、ご自宅に招いてもらい、奥様にお昼を振舞って頂いたのだが、ご飯はもちろんのこと、一つひとつの食材の美味なこと、筆舌に尽くしがたいものがあった。「枝豆腐には、お醤油も塩もかけないで召し上がってください」と言われたので、その通りしてみると、枝豆の味と香りがそのまま保たれた絶品であった。野菜の天麩羅や煮物にしても、一つひとつの野菜に濃厚な味が備わっている。サラダも然り。本物の水



町田宗鳳(まちだ・そうほう) 1950年生まれ。14歳で出家し、臨済宗大徳寺で修行した後、34歳で寺を離れ、渡米。ハーバード大学神学部修士課程、ペンシルバニア大学中東・アジア学部博士課程を修了、プリンストン大学、国立シンガポール大学などを経て、現職。専攻は比較宗教学、比較文明学、生命倫理学。ホームページ: www.tufs.ac.jp/ts/personal/souho/

菜やレタスの味がしている。スーパーで買い求めてきた野菜では、こうはいかない。

単に美味なだけではない。健康促進にも大変良いようだ。若いときは病気がちだった長澤さんも、この農法で採れた作物を常食するようになってから、まったく病気が知らずになったそうである。成人病の急増や若者の情緒不安定が深刻な状況を呈している現代社会において、われわれは日々に口にする食料の内容に、もっと真剣な眼差しを向けるべきだろう。

お食事を頂いていたとき、ふと裏庭に色とりどりの花が咲いているのが目に止まったので、あれも「無肥料、無農薬」でしょうかと尋ねてみると、確かにそうだという。心なしか、ふつうの花よりも色あざやかに見えた。長澤さんによれば、年々歳々、土壌の質は向上し、収穫高が上がっているそうである。農地に鋤きこむのは、

収穫後のワラと、そこに生えた雑草を枯らしたものの以外、何もないそうである。夏でも野菜に水をやることもほとんどなく、唯一の農作業は除草だけだという。しかも、害虫や病気で作物が被害に遭うことも、ほとんどないというから、ただただ驚きである。

とはいっても、この広大な八郎潟干拓地では従来の農法で稲作をしている農家も多いはずだから、よその農地から害虫が飛んできたり、病気が感染してくることもあるはずである。そのような素朴な疑問が湧いてきたので確かめてみると、確かに隣接する農地との境界線付近では、虫にやられたり、病気が移ることもあるそうだ。

しかし、しばらく放置すれば、害虫は天敵に食い尽くされ、病気は自然治癒するそうである。農薬の混ざっていない土地には天敵となる幾種類もの生物が集まり、一夜にして、害虫が消えてなくなるという奇跡めいたことも起こるそうだ。それに、自然農法の稲には強い抵抗力があるので、短期間感染しても、病気を撥ね返してしまいうそうである。人間も、かくやりたいものだ。

私も禅寺で修行時代、菜園を長く担当していたので、作物を育てることの難しさを嫌ほど知っている。だから、長澤さんの話をまるで驚天動地の発見でもあるかの

ように、固唾を呑んで聞いた。自給自足の禅道場では野菜の不作が許されないので、いつも京都大学の馬術部まで行って、馬糞を譲ってもらい、トラックで寺まで運んだ記憶がある。それを汗水垂らして、畝に鋤きこんでいくのである。悪臭を放つ人糞とも格闘しながら、掘り起こした畝に注ぎこんだ。しかし、あの苦勞は、すべて徒勞だったのである。

肥料にも農薬にも、まったくお金をかけずに、作物がスクスクと育つなら、こんなありがたいことはない。とはいえ、長澤さんの成功は、一朝一夕に実現したわけではない。この農法を始めたとき、すでに干拓地の土壌は決して健全な状態ではなく、三年ぐらいいは、ともに作物が育たなかったという。たとえば、稲も立ち枯れ状態になったり、根から腐るような病気がかかったりすることがあったらしい。

それでも諦めずに自然農法を実践しているうちに、土壌が改善され、作物も抵抗力を増し、今日のような着実な収穫が期待できるようになったのである。この農法で決め手となるのは、その土地で育った種子を使うことらしいから、毎年、種を採取しているうちに、ますます逞しい作物へと変容を遂げていくことになる。

そうすれば、いわゆる連作も問題がなくなり、同じ土地で同じ作物を何年育てても、プラスにこそなれ、マイナスにはならないそうである。このような自然農法が普及すれば、人間の健康促進に貢献するだけでなく、地球環境の保護に大いに役立つだろう。となれば、まさに二十一世紀における農業革命であり、かつての産業革命に匹敵するものと言っても過言ではない。

自然農法から教育が学ぶこと

さて、このような自然農法から、われわれは何を学び得るのか。ひとつは、われわれがさまじまな思い込み、囚われの中で、日々の生活をしているのではないかと、いうことである。それが絶対不可欠と思っていることも、ほんとうは不要であり、むしろ、ないほうが良いのかもしれない。

卑近な例だが、多忙な私は昼食を抜くことがよくある。以前は三食欠かさず食べないといけないと思いつていたのだが、一食抜くことによって、かえって体が軽くなった。それも、小さな思い込みからの解放である。ここで自然農法的な教育の可能性について考えてみたのだが、教育にとつての「肥料」とは何であろうか。

幾通りもの解釈の仕方があるだろうが、ひとつは教科書である。われわれはできるだけ栄養素の高い教科書を子どもたちに与え、それによって彼らの知識をなるべく豊かなものにしてやうとしている。

高度な知識を詰め込んだ教科書よりも、へゆとりのある教科書のほうが良いとか、戦争の歴史を自虐的に記述した教科書よりも、日本国家の尊厳を重んじた教科書のほうが良いとか、侃々諤々の議論があるわけだが、いずれの教科書も一切不要であるという見解は、寡聞にして今のところ聞かない。

断片的知識を網羅する教科書ではなく、人類の精神遺産となつてゐる古典や、内容の深い一般書をじっくりと読ませたりすることによって、若者の知識を磨いたほうが良いのかもしれない。記憶するための情報としてではなく、魂の糧としての知識は、現在の教科書からは吸収することが難しい。

教科書でも無用の「肥料」となれば、何種類もの参考書を読ませることなど、生徒のアタマを栄養過多状態にして、情報の肥満児を作るようなものである。そういう傾向を改めるために、教室での学習量を減らし、子どもたちにテーマを与えてから、それに基づいてフィールド

ワークをさせる時間を増やすことも考えられる。

大切なことは、知識を無秩序に与えるのではなく、生徒の思考力を鍛えることである。それは自然農法において、肥料がなくとも遅しく育っていく稲の生育力に相当する。そのためには、子どもたちに自主的に考えさせ、判断させる機会を少しでも増やさなくてはならない。

そもそもへゆとり教育とは、生徒の思考力増強を目論んだはずのものであったが、学力の低下ばかりが目について、期待されたほどの成果があがっていないようだ。

建前の道徳論は害ある農薬にすぎない

では、「農薬」に相当するものは、何であろうか。子どもたちが反社会的な人間にならないようにと施される道徳教育が、それかもしれない。あれをしてはいけない、これをしてはいけない、という道徳教育によって、子どもが真つ当な人間になると思い込んでいるフシがある。

しかし現実には、子どもたちという稲が、さまざまな心の病気に冒されていることは、論を俟たない。本来は無邪気で明るいはずの子どもたちが、不登校、引きこもり、家庭内暴力、イジメ、多動障害、万引き等々の問題

ある行動を見せている。そんな深刻な問題ではなくとも、公共の場で傍若無人に振舞う若者を見ていると、基本的な躰さえ受けていないことが痛感される。

とどき少年による凶悪犯罪が起きると、その子の性格や家族の異常性を糾弾するような報道が続くが、病気の稲一本が見つければ、他にも多数の稲が病んでいるはずである。潜在的には、同じ問題を抱えている子どもたちは、無数にいるに違いない。

にもかかわらず、病気にかかった稲一本をあたかも「害虫」でもあるかのように血祭りにあげて、何の意味があるのだろうか。改善すべきは、社会という水田の状態である。稲が病むのは、水と土が病んでいるからにほかならない。

そして、それらの問題に対して、大人の側はほとんどお手上げ状態なのであるが、厳しい道徳教育という強い農薬を施せば、改善することができるかもしれないという期待すら抱いている向きもある。

しかし、それはまったくの思い違いではなからうか。権威主義的な道徳律を押しつけるのではなく、子どもたちが本来備えている生命力や生命感覚というものを伸ばしてこそ、彼らの行動はおのずからバランスの取れたもの

のへと回復していくように思われる。

簡条書きの道徳論ほど、無意味なものはない。ましてや、それを瘦せた人生を生きてきた大人が、もっともらしく語れば、さらに道徳をつまらないものにしてしまうだろう。若者の頭脳は、本能的に建前を拒絶するように仕組まれていることを忘れてはならない。むしろ、親や教師が自分たちの失敗談を苦々しく語ったほうが、はるかに説得力のある道徳教育になる。

さらに厳密に教育における「農薬」の意味を探っていけば、親自身の実際の生き方から遊離したところから、子どもへの成長に介入しようとする言動と行動のすべてが、それに相当することになる。自分の生き様とかけ離れた言葉を子どもに投げかければ、投げかけるほど、若い魂は無意識にその虚偽性に反発する。「もっと勉強しなさい」と言うにせよ、「マジメに働きなさい」と言うにせよ、親がそのように行動していなければ、それは毒性の強い「農薬」となる。

親が怠け者なら、子どもにも怠け者であることの楽しさを語り、親が愚か者なら、愚か者であることの極意を自信に満ち満ちて語るのが、真の教育なのである。少しでも建前を語れば、「農薬」をばら撒くことになる。

私事に及んで恐縮だが、私は愚息の二人に幼いときから、「もっと外に出て遊びなさい」という言葉を執拗に繰り返したものの、一度たりとも「勉強しなさい」と言った記憶はない。それは私自身が、日々に健康であることの重要性を痛感しているからだ。知的鍛錬は、成長してからでもできるが、肉体的鍛錬はできるだけ早くからしておかなくてはならない。

現在、アイビーリーグの大学でそれぞれ生物学や建築学を学んでいる息子たちが、とかく奇行の多い父親を尊敬してくれているとは思わないが、個性豊かな若者に育ってくれたことに、私は感謝している。私の貢献があるとすれば、愚かな私が「いいお父さん」を演じなかったことぐらいであろう。

教育における太陽と水と土とは

肥料も農薬も施さない田畑でスクスクと作物を育てるのは、太陽と水と土の力である。教育にも、もっと骨太の教育があっても良いのではないか。

太陽は、親や教師の愛情である。何らかの事情で肉親のいない境遇であっても、周囲の大人が偽りのない愛情を降り注げば、大丈夫だ。それがなければ、どのような

芽も育たない。

土は、社会環境である。退廃的な社会では、いくら教育に力を注いでも、若者の魂は有害物質をスポンジのように吸い取ってしまう。日本国民が日本という国を愛することができない風潮が漂っているが、これはまずい。戦争体験によって、愛国主義という言葉が汚されてしまったが、自分たちの住む国土を愛せないのは、人間にとって大きな不幸である。

水は、知識である。田に流れ込む水が汚染されておれば、たちまち稲は病む。われわれは、正しい知識を供給しているだろうか。毎日テレビや雑誌から大量に流れ込む知識の低劣さのことを考えれば、状況は相当深刻である。

そのように考えれば、自然農法的な教育は、教師一人、あるいは特定の学校だけで実践できるものではない。日本という国全体が、そのような教育を志向するようにならないければならない。そんなことは、到底あり得ないと思ってしまう。どこかで農業革命ならぬ教育革命のようなことが起きないかぎり、日本の未来は決して明るいものとはならないだろう。教育の世界においても、勇氣ある革命の士を求めたい。